



執筆者

関野 和寛

せきの かずひろ

ルーテル津田沼教会 牧師
チャプレン(病院付き聖職者)

新型コロナウイルス感染症パンデミックの中アメリカに渡り、ミネソタ州Abbott Northwestern Hospitalのコロナ病棟で、チャプレンとして看取り、心のケアを行う。帰国後、国内のいくつかの医療機関でチャプレンとして働きつつ、ルーテル津田沼教会の牧師をしている。

コロナパンデミックが 炙り出した看取りの現場の真実

「一人ではありません。チャプレンがそばにいます」

私は20歳の時に「病院で働く聖職者『チャプレン』になりたい」と決断し、牧師になりました。それは自分の家族が病院で危篤状況になってしまった時、知り合いの牧師が新幹線で駆けつけて私たちが家族を励ましてくれるその姿に心を打たれたからです。

◆ ◆ ◆
牧師になり、新宿の教会で14年間働いた後、病院で働きながらチャプレン(病院付き聖職者)の資格を取るためにアメリカに渡りました。

◆ ◆ ◆
アメリカでは約6割の病院にチャプレンがいて、宗教を超えて患者さんやその家族の心のケアを行っています。奇しくも私が渡米した2020年7月はコロナパンデミックで世界が大混乱。しかもアメリカのコロナ感染者数は世界最悪の状態だったのです。その渦中、

私はミネソタ州の総合病院のコロナ病棟で毎日働くことになりました。

◆ ◆ ◆
早速、看取りに呼ばれました。全身防護服に身を包み病室に入ると、既に意識のない患者さんのそばにタブレット端末が置かれ、画面越しにご家族が嗚咽しながら必死に声かけをしています。

◆ ◆ ◆
最愛の家族を急に失う事態、しかも病室内に行き、その手を握ることも許されないのです。野戦病院ながらの状況に医師やナースに時間的余裕は一切ありません。だからこそチャプレンが病室に入り、患者さんの最期を看取るのです。画面の向こうの「ご家族に」受け入れ難い現実だと思いますが、この方を私は一人にはしません。そばにいて手を握っております」と伝えます。

◆ ◆ ◆
目の前にいる患者さんとは初対面。けれども声をかけます。「大丈夫です、一人ではありません。チャプレンがそばにいます」「今日まで生きてきてくださり、ありがとうございます。もうすぐ天国ですよ」と。

◆ ◆ ◆
全くの他人である私が最期に立ち会い、声をかけること、しかも行ったこともない天国について伝えることには大きな戸惑いを感じます。けれども「誰かがそばにいないではならない」「自分が死の間際に言われたいことを伝えよう」と毎回自問自答しました。

◆ ◆ ◆
またクリスチャンだけでなく、イスラム教徒の方から「コーランを持ってきてほしい」、ネイティブアメリカンの方から「病室と身体を清めるからタバコを持ってきて」というリクエストを受け、その儀式を行うサポートをすることもありました。

◆ ◆ ◆
ここまで聞くと、遠い外国の話に聞こえるかもしれませんがそうではありません。アメリカでも日本でも宗教の有無に関係なく、多くの患者さんご自身、これまでの人生、喜び、喪失、ざんげ、思い出などを多く語ります。

◆ ◆ ◆
医師は回診の時に「調子はどうですか? 心配なことはありませんか?」と聞きますが、十分な時間がないことを知っている患者さんは「大丈夫です」と答えていることが多いのではないのでしょうか。

◆ ◆ ◆
けれども本当は「大丈夫」ではありません。そこには聴診器では聞き取れない、孤独、不安、死へ向かう言葉にできない思いがあり、多くの患者さんはその中で一人、時を過ごしています。コロナの時代により死の現場の真実が炙り出されたのではないのでしょうか。「医療機関が魂に寄り添う医療」「自分らしい最期を」とうたいます。それを医療従事者とチームを組みながら実現するのがチャプレン、宗教者である私は信じております。

